

2-5

保護者による「学校評価」と、 「家庭の教育力」発揮の状況

ベネッセ教育研究開発センター 小林 洋

はじめに

前回の「学力向上のための基本調査2004」と同様に、今回の調査においても、子どもの学習到達度調査・学習意識調査を実施した学校に、教師・校長調査と合わせて、保護者へのアンケート調査を実施している。調査項目の若干の入れ替えや追加はあるが、前回同様に、「保護者の学校の取り組みに対する認識・評価」と「家庭での子どもに対する働きかけの状況」を主な調査内容としており、結果(回答状況)も概ね同じ傾向を示している。したがって、報告の内容はかなり前回の報告書に委ねられる部分が多い(前回調査の結果については、報告書『総合教育力の向上が子どもの学力を伸ばす』を参照)。しかし、文部科学省から2006年3月に「学校評価のガイドライン」が示され、「学校評価」における学校の自己評価の情報源としての保護者の意識・意見の具体的な活用の仕方に対する学校の意識が高まっていくであろうことや、また、「家庭の教育力」については「父母その他の保護者は、子の教育について第一義的責任を有する」とした改正教育基本法が成立したこともあり、「家庭の教育力」の望ましい在り方とそれをどう高めていくかについてこれから改めて関心が高まっていくことが予想されることを考えると、これらのテーマに関する新鮮な参考材料の一つとして今回の調査結果を改めて報告しておくことは意味があることと考える。そこで、前回調査の報告内容との重複も必要に応じていとわないうものにした。なお、「子どもに対する働きかけ」についての保護者への設問項目と回答状況は、後章で「読解力」育成との関係を調べるための基礎情報となるものである。

1 学校の学力向上への取り組みに関する保護者の評価と満足度

図表2-5-1は、学校の学力向上への取り組み状況に対する保護者の認識・評価を示したものである。前回と同様に、「学校の経営力」のMOREモデルの4つの領域(学校の経営方針、組織・体制の連携、教育資源の有効活用、教育課程の整備・充実)に対応した領域について全20項目にわたって

質問項目(評価項目)を設定し、その回答状況を小学校と中学校の保護者のそれぞれについて表示している。

以下に、順次、各領域について回答状況を見ていくことにしよう。

1 学校の経営方針 一情報公開と説明責任で肯定的評価の保護者は、 小学校6割強、中学校4割程度

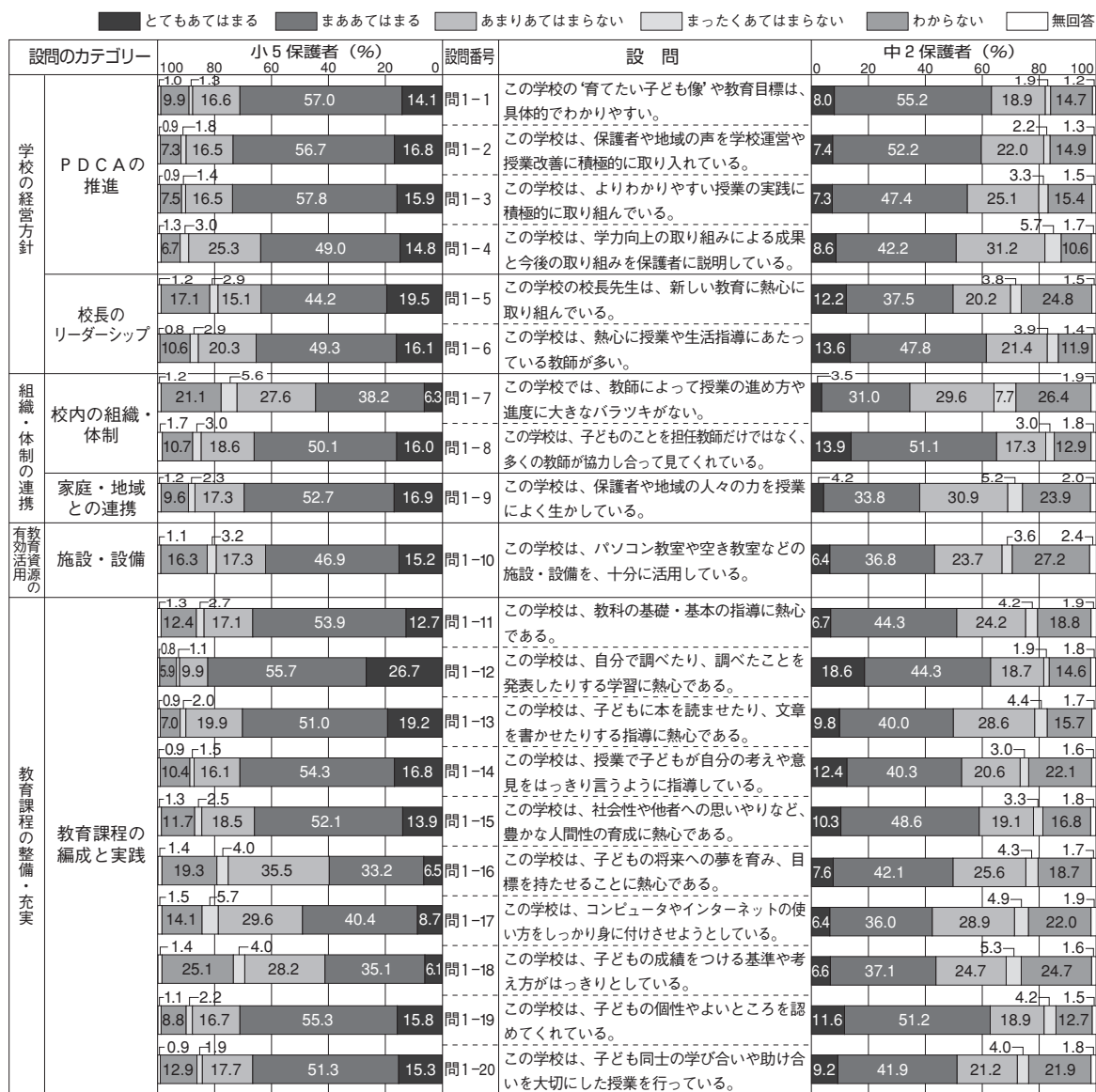
この領域では、学校のPDCAの推進状況や校長のリーダーシップ発揮の状況を保護者に問うている。設問に対する「とてもあてはまる」「まああてはまる」というトップボックスとセカンドボックスの数値の合計(肯定割合)で見ると、小学校の保護者では70%前後、中学校の保護者では50%~60%が、この領域の設問項目に対して肯定的に評

価している。例えば、「問1-1 この学校の‘育てたい子ども像’や教育目標はわかりやすい」という項目に対する肯定割合は、小学校で71%(前回73%)、中学校で63%(前回65%)であり、前回とほぼ同じ数値となっている。(なお、前回と今回の調査とは調査母体ならびに実施時期が異なり、数値の比較は参考程度の意味しかもたない。この

ことは、前回調査との比較全般について言えることである。)この領域で、肯定的な評価が最も高い項目は、小学校では「問1-3 よりわかりやすい授業の実践に積極的に取り組んでいる」(74%、中学校55%)であり、中学校では、問1-1の63%である。反対に、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」という否定的評価の割合が最

も高いのは、小・中学校ともに「問1-4 学力向上による成果と今後の取り組みを保護者に説明している」という情報の公開と説明責任に関する項目である。この項目では、否定的評価の割合が、小学校で28%、中学校で37%となっており、説明責任の遂行に課題のある学校がまだ少ないことを示している。

図表2-5-1 保護者による「学校評価」の状況 — 学校の学力向上の取り組みに対する保護者の認識



「あなたのお子様を通っている学校では、次のようなことはどの程度あてはまりますか？」という問に対する回答状況を表す。有効回答件数は、小学校：約1810件、中学校：約2280件。

2 組織・体制の連携 — 「熱心な先生が多い」に小・中ともに6割以上が肯定的、ただし、「指導のバラツキのなさ(統一性)」では肯定的評価は4割程度

この領域では、「校内の組織・体制」と、「家庭・地域との連携」についての評価項目を設けている。

この領域で、肯定的な評価の割合が一番低いのは、小学校、中学校ともに「問1-7 教師によって授業の進め方や進度に大きなバラツキがない」という「学校としての指導の統一性」に関わる項目であり、小学校45%、中学校35%となっている。いわゆる「我が子の担任先生のあたりはずれ」という感覚を抱いてしまう保護者が少なくない状況がうかがえる。他方、「問1-8 子どものことを担任教師だけでなく、多くの教師が協力し合っていて見ている」という「集団指導体制」の確立の状況を問う項目や「問1-6 熱心に授業や生活指導にあたっている教師が多い」という教師の「教育への

コミットメント」の状況を問う項目では、小学校、中学校ともに6割以上の保護者が肯定的に評価している。ただし、これらの項目について、「とてもあてはまる」というトップボックスの数値で見ると2割に満たないことや、否定的な回答も2割程度存在していることには注意を向けておきたい。

「問1-9 保護者や地域の人々の力を授業によく生かしている」という「保護者・地域の人材活用」に関する項目については、小学校ではこの領域で最も高い評価(70%)となっているが、中学校では「指導の統一性(バラツキのなさ)」に次いで低い評価(38%)となっている。保護者や地域の人材活用をめぐる状況は、小学校と中学校の間で、かなり異なることがうかがえる。

3 教育資源の有効活用 — 中学校の保護者の肯定的評価が小学校と比べて低い

この領域では、「問1-10 パソコン教室や空き教室などの施設・設備を十分に活用している」という一項目のみを問うている。小学校の保護者に

比べて、中学校の保護者の肯定的な評価は低く、「わからない」という回答の割合も最も高くなっている。

4 教育課程の整備・充実 — 「将来の夢を育み目標を持たせることに熱心」の肯定的評価は、小学校で4割、中学校で5割

この領域では、教科学力・学びの基礎力・社会的実践力のバランスのよい育成が、適切なカリキュラムや教育方法で図られているかどうかに関して保護者の評価を問うている(項目数の制限で必ずしも網羅的な質問とはなっていない)。なお、「問1-13 子どもに本を読ませたり、文章を書かせたりする指導に熱心である」、「問1-14 授業で子どもが自分の考えや意見をはっきり言うように指導している」という2つの項目は、「読解力」向上に有効と考えられる指導の例として、今回の調査で新しく加えたものである。

この領域で、保護者の肯定的評価が最も高いのは、小・中学校ともに「問1-12 自分で調べたり、調べたことを発表したりする学習に熱心」という問題解決的な学習に関する項目であり、小学校82%、中学校63%となっている。この数値に比べると、「問1-11 教科の基礎・基本の指導に熱心」という項目に対する肯定的な評価の割合は、小学校、中学校ともに低く、それぞれ、67%、51%となっている。これには、調べたり発表したりする

という問題解決的な学習活動が、保護者にそれと認知されやすいという要因も考えられるが、現状の教科の基礎・基本の指導に対する保護者の期待と現実のズレを反映していることも考えられる。

保護者の肯定的な評価が最も低いのは、小学校では「問1-16 子どもの将来への夢を育み、目標を持たせることに熱心」(40%、中学校50%)、次いで、ほぼ同じ数値で「問1-18 成績をつける基準や考え方がはっきりとしている」という項目(41%、中学校44%)であり、中学校では「問1-17 コンピュータやインターネットの使い方をしっかり身に付けさせようとしている」(42%)、次いで、ほぼ同じ数値で小学校と同じく「成績をつける基準や考え方」の項目(上記)となっている。

「問1-16 将来への夢を育み、目標を持たせる指導」は、キャリア教育が目指している重要なテーマである。この指導は、「自分の将来の進路や生き方を考える力」の育成とも密接な関係があるが、この力の育成に関する保護者の「家庭と学校との役割分担」の意識を見ると、小学校、中学校とも

に「家庭の役割が重要」とする割合のほうが「学校の役割が重要」とする割合よりも高くなっている(図表2-5-5参照)。すなわち、保護者自身もこのテーマは学校に委ねるべき課題というよりも自らの課題と認識しているのである。キャリア教育

の充実と強化を図っていく上でも、保護者のこの「自らの役割」意識の高さは、学校と保護者との連携をより深めていくことができる可能性の高さを示唆している。

2 保護者の「学校評価」と子どもの「読解力」との関係

1 「読解力」の育成状況の違いが、保護者の学校評価の違いとして現われている

次に、「基本調査2006」の中心テーマである「読解力」の育成と、保護者の「学校評価」との関係を見ておこう。

図表2-5-2は、上で見てきた学校の学力向上の取り組みに対する保護者の評価を問う項目において、肯定的な評価をしている保護者群と否定的な評価をしている保護者群のそれぞれの子どもの

「読解力」スコア(偏差値)を示したものである。検定の「*」「**」のマークは、両群の「読解力」のスコアの差が、それぞれ5%と1%の危険水準で統計的に有意であることを示している。ここに取り上げた項目は、小5か中2の少なくとも一方で両群の差が統計的に有意な項目である。

図表2-5-2 保護者の「学校評価」と子どもの「読解力」との関係

設問番号	設問	群	読解力			
			小5	検定	中2	検定
問1-5	この学校の校長先生は、新しい教育に熱心に取り組んでいる。	肯定	50.3	*	50.7	**
		否定	49.0		48.4	
問1-6	この学校は、熱心に授業や生活指導にあたっている教師が多い。	肯定	50.6	**	50.6	**
		否定	48.0		48.8	
問1-7	この学校では、教師によって授業の進め方や進度に大きなバラツキがない。	肯定	50.5		51.3	**
		否定	49.5		49.3	
問1-8	この学校は、子どものことを担任教師だけではなく、多くの教師が協力し合って見ている。	肯定	50.4	**	50.4	*
		否定	48.7		48.9	
問1-11	この学校は、教科の基礎・基本の指導に熱心である。	肯定	50.6	**	50.6	**
		否定	48.7		49.2	
問1-12	この学校は、自分で調べたり、調べたことを発表したりする学習に熱心である。	肯定	50.4	**	51.0	**
		否定	48.4		48.2	
問1-13	この学校は、子どもに本を読ませたり、文章を書かせたりする指導に熱心である。	肯定	50.4	*	50.9	**
		否定	49.0		49.1	
問1-14	この学校は、授業で子どもが自分の考えや意見をはっきり言うように指導している。	肯定	50.4	*	50.8	**
		否定	48.9		48.7	
問1-16	この学校は、子どもの将来への夢を育み、目標を持たせることに熱心である。	肯定	50.2		50.8	**
		否定	49.8		48.8	
問1-19	この学校は、子どもの個性やよいところを認めてくれている。	肯定	50.2	*	50.4	*
		否定	48.9		49.1	
問1-20	この学校は、子ども同士の学び合いや助け合いを大切に授業を行っている。	肯定	50.2		50.7	**
		否定	49.6		49.0	

各設問に対して「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答している保護者を肯定群、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と回答している保護者を否定群とし、それぞれの群に属する子どもの「読解力」スコア(偏差値)の平均と、両群の差の検定結果を示す。「*」「**」は、それぞれ両群の差が、1%水準、5%水準で統計的に有意であることをあらわす。

図表2-5-2において、どの項目についても、「肯定的な評価をしている保護者の子どもの読解力」>「否定的な評価をしている保護者の子どもの読解力」という関係を示していることが見て取れる。保護者から肯定的な評価を受けられるような取り組みを行っている学校は、そうでない学校よ

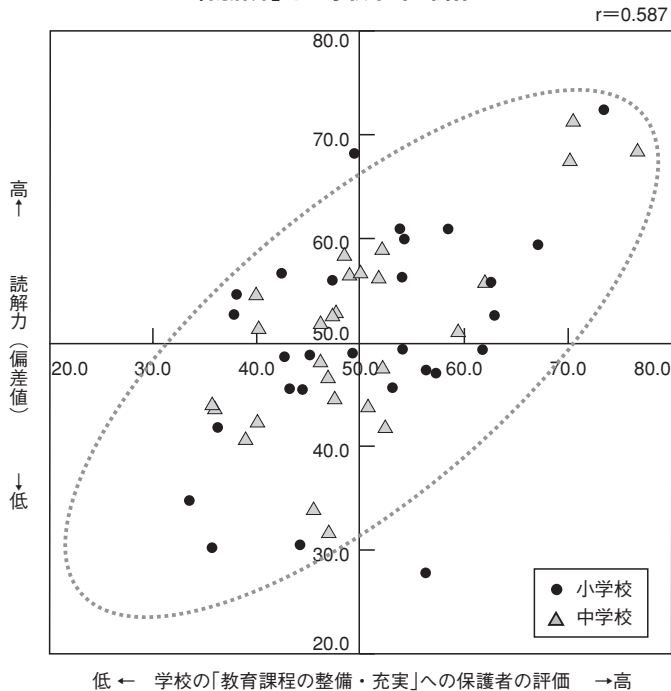
りも子どもの「読解力」育成においても高い成果を上げていることがうかがえる。なるほど、例えば、「子どもに本を読ませたり、文章を書かせたりする指導に熱心だ」と保護者に評価される学校とそうでない学校とでは、子どもの「読解力」に差が生まれていることは容易に想像がつく。また、第3章1

節で見ると、「読解力」のスコアと教科学力のスコアとは正の相関関係があり、「読解力」の育成・向上と教科学力の向上とは密接に関係があることから、「教科の基礎・基本の指導に熱心だ」と保護者に評価される学校とそうでない学校の間でも、子どもの「読解力」に差が生まれることは必然的であろう。他の項目についても、保護者の評価と子どもの「読解力」との関係が生じる具体的な要因や背景について個別に検討する必要があるが、ここでは、図表2-5-2を以て、両者の関係の

存在の紹介のみにとどめておく。なお、教科学力や学びの基礎力、社会的実践力についても、保護者の評価と子どもの力との間には、項目による関係の強弱の違いはあるものの、「読解力」の場合と同様な関係が見出されることを付記しておく。

図表2-5-2は、保護者の評価と子どもの「読解力」との関係を学校単位で見たものではないが、この関係をとくに学校単位で見たものが図表2-5-3である。

図表2-5-3 保護者の学校評価（教育課程の整備・充実）と「読解力」との学校平均の関係



この分布から学校の学力向上の取り組み（「教育課程の整備・充実」の領域）に対する保護者の評価の学校平均と子どもの「読解力」の学校平均とは正の相関関係があることが見て取れる。子どもの「読解力」向上に資するような取り組みを行っている学校に対する保護者の評価は高い傾向がうかがえる。

図表2-5-4は、学校の学力向上の取り組みの成果としての子どもの変容に関する保護者の認識と、子どもの「読解力」との関係を示したものである。図表2-5-2で見た学校の学力向上の取り組み状況に対する保護者の評価の場合と同様な関係が、保護者の学校教育の成果認識と子どもの「読

解力」との間にもあることがわかる。学校教育の成果を問う各項目に対する保護者の回答状況ここでは省略している。概要を紹介しておく、保護者の成果認識は、教師の成果認識よりも全般に辛く、「とてもあてはまる」と積極的に評価する割合が10%を超える項目の数は、24の質問項目中、小学校の保護者については11問、中学校の保護者については7問となっている。「まああてはまる」のセカンドボックスまでの合計でみた肯定的な評価の割合は、小学校、中学校ともに約40%から約70%の間に分布している。この保護者の学校教育の成果認識の全体的な傾向は前回とほぼ同様である（前回報告書『総合教育力の向上が子どもの学力を伸ばす』参照）。

図表2-5-4に見るように、両群の「読解力」スコア(偏差値)の差が1%水準の統計的な有意差を示している項目(「**」のついたもの)が多いが、この中でとくに「検定」欄に網かけした項目は、偏差値の差が3ポイント以上の比較的大きな差を示しているものである。とくに「問2-10 子どもがノートの取り方や調べ方など、勉強の仕方を工夫するようになった」および「問2-14 子どもが自分で情報を集めて、学習に生かすようになった」という2つの項目については、小学校、中学校ともに、網かけのついた項目となっており、とくに後者は、小学校、中学校ともに最も両群の差が大きい項目であり、「読解力」育成との関係が深い項

目であることがうかがえる。また、「問2-2 じっくり筋道を立てて考えるようになった」、「問2-13 ねばり強く考えるようになった」という学習継続力の向上を評価する項目や、「問2-4 文章を書く力や話す力が育ってきた」という表現・表出力の向上を評価する項目についても、両群に比較的顕著な差が見られることも「読解力」育成を考えるにあたって示唆的である。

以上のように、学校による子どもの「読解力」の育成状況の違いについても、保護者の学校の取り組みに対する評価の違いとして反映していることがわかる。

図表2-5-4 学校の学力向上の取り組みへの保護者の成果認識と子どもの「読解力」との関係

設問領域	設問番号	設 問	群	読解力			
				小5	検定	中2	検定
教科学力	問2-1	子どもの教科の成績が上がってきた。	肯定	51.3	**	51.9	**
			否定	48.7		48.8	
	問2-2	子どもがじっくり筋道立てて物事を考えるようになってきた。	肯定	50.8	**	51.6	**
			否定	49.0		48.1	
	問2-3	子どもが主体的に考え、判断するようになってきた。	肯定	50.6	**	51.0	**
			否定	48.9		48.0	
問2-4	子どもの文章を書く力や話す力が育ってきた。	肯定	51.0	**	51.7	**	
		否定	48.8		48.6		
問2-5	子どもが意欲的に勉強するようになってきた。	肯定	50.9	**	51.4	**	
		否定	49.0		48.6		
問2-6	子どもが学んだことを生活で生かすようになってきた。	肯定	50.3		50.6	**	
		否定	49.5		49.3		
学びの基礎力	問2-8	子どもがこれまで苦手意識をもっていた科目も勉強するようになった。	肯定	50.8	**	51.2	**
			否定	49.4		48.8	
	問2-9	子どもに「やればできる」という自信がついてきた。	肯定	50.6	**	51.3	**
			否定	49.0		48.3	
	問2-10	子どもがノートの取り方や調べ方など、勉強の仕方を工夫するようになってきた。	肯定	51.7	**	51.6	**
			否定	48.4		48.3	
問2-11	子どもが、計画的に勉強するようになってきた。	肯定	51.3	**	51.7	**	
		否定	49.0		48.5		
問2-12	子どもが人の話を最後まで聞くことができるようになってきた。	肯定	50.5	*	50.7	**	
		否定	49.3		48.7		
問2-13	子どもがわかるまでねばり強く考えるようになってきた。	肯定	51.6	**	52.2	**	
		否定	48.6		48.4		
社会的実践力	問2-14	子どもが自分で情報を集めて、学習に生かすようになってきた。	肯定	51.4	**	52.3	**
			否定	48.0		47.8	
	問2-15	子どもが調べたり考えたりしたことを、わかりやすく話せるようになってきた。	肯定	51.2	**	51.8	**
			否定	48.4		48.1	
	問2-17	子どもの社会の出来事への関心が高まってきた。	肯定	50.6	**	50.7	**
			否定	48.6		48.7	
問2-20	子どもに協調性や人の考えを尊重する姿勢が育ってきた。	肯定	50.5	**	50.7	**	
		否定	48.7		48.2		
問2-22	子どもの態度に落ち着きと自信が感じられるようになってきた。	肯定	51.2	**	51.1	**	
		否定	48.2		48.5		
問2-23	将来への夢や目標についての子どもの考えが深まってきた。	肯定	50.6	*	50.8	**	
		否定	49.7		49.0		

各設問に対して「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答している保護者を肯定群、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と回答している保護者を否定群とし、それぞれの群に属する子どもの「読解力」スコア(偏差値)の平均と、両群の差の検定結果を示す。「*」「**」は、それぞれ両群の差が、1%水準、5%水準で統計的に有意であることをあらわす。検定欄に網掛けしている項目は、両群の偏差値差が3ポイント以上のもの。

3 保護者の総合的な満足度と学校の取り組みに対する認識・評価との関係

保護者の学校に対する総合的な満足度の指標の一つと考えられる「この学校に子どもを通わせてよかった」という項目への回答状況と、学校の学力向上の取り組みに対する保護者の認識・評価やその成果認識との間には、前回の報告と同様に正の相関関係が見られる。また、保護者の満足度との相関関係は、図表2-5-1で見た学校の取り組み状況の認識・評価のほうが、図表2-5-4にあるような子どもの変容認識(学校教育の成果認識)

よりもよりシャープであることも前回と同様である。言い換えるならば保護者は学校教育の成果(=結果)そのものよりも、学校・教師がどれだけ熱心に教育に取り組んでいるかということにより強く反応しており、後者が保護者の満足度をより強く左右している要因となっているということである。(これらの相関関係についての図表や含意については第6章3節参照。)

4 家庭と学校の役割分担についての保護者の意識 - 教師意識との対比

1 教育の役割分担に対する保護者と教師の意識には大きな差はない

図表2-5-5は、家庭と学校の教育の役割分担に関する小学校の保護者と教師の意識を対比して

示したものである。なお、図表では保護者、教師ともに無回答を分母から除いた割合を示している。

図表2-5-5 家庭と学校の役割分担に関する保護者と教師の認識(小学校)

〈家庭の役割〉

■ とても重要 ■ まあ重要 ■ あまり重要ではない □ まったく重要ではない

設問のカテゴリ	教師 (%)					設 問	保護者 (%)						
	100	80	60	40	20		0	0	20	40	60	80	100
教科学力	42.4					基礎的な学力	47.1					47.8	4.9
	8.1					8.1	32.0					56.0	11.5
	5.6					5.6	41.9					53.5	4.4
	30.2					30.2	61.3					37.1	1.5
学びの基礎力	97.0					基本的な生活習慣(規則正しい生活など)	89.4					10.3	0.3
	5.3					5.3	53.6					43.3	3.0
	11.8					11.8	31.7					59.9	8.2
	14.5					14.5	75.4					23.8	0.8
社会的実践力	11.5					11.5	45.6					48.7	3.4
	33.4					33.4	60.8					36.1	3.0
	9.1					9.1	47.6					46.9	5.3
	19.6					19.6	70.9					27.8	1.3
その他	12.6					12.6	80.5					19.0	0.5

〈学校の役割〉

設問のカテゴリー	教師 (%)					設 問	保護者 (%)					
	100	80	60	40	20		0	0	20	40	60	80
教科学力	7.2			92.6		基礎的な学力			89.1			10.4
	9.0	36.0		54.7		上級学校への進学に必要な学力		54.3		37.7		7.8
	11.4			88.6		文章力や計算力			77.6			21.8
	9.8			90.0		学習への意欲や学ぶ姿勢			77.0			22.5
学びの基礎力	44.8			52.1		基本的な生活習慣（規則正しい生活など）		41.3		52.1		6.2
	12.5			87.2		学ぶことの意義をつかませること			75.9			23.2
	12.9			86.7		より良い学び方や計画的な学習の進め方			75.2			23.4
	19.2			80.2		途中で投げださず最後までやりとげる力			69.1			29.5
社会的実践力	14.6			84.8		自ら課題を発見し、解決していく力		62.7		35.1		4.0
	34.6			64.0		社会や時代の変化に対応する力		50.9		45.1		4.0
	7.2			92.5		集団で生活し協力していく力			87.5			11.6
	32.6			66.1		自分の将来の進路や生き方を考える力		49.7		46.2		4.0
その他	28.4			69.9		心身の健康と体力づくり		57.6		40.4		1.9

保護者については、小学校で25%程度、中学校で30%程度の無回答、教師については、3～5%程度の無回答を分母から除いた割合を示している。無回答を除いた保護者の数値は、無回答が数%程度であった前回の調査のものと同様な傾向を示している(前回報告書参照)。

教育の役割分担に関する保護者の回答傾向は、前回調査時とほぼ同じであり、「**基本的な生活習慣の確立**」「**自分の将来や進路や生き方を考える力**」「**社会や時代の変化に対応する力**」「**心身の健康と体力づくり**」などで、「**家庭の役割**」>「**学校の役割**」となっており、反対に、「**基礎的な学力**」「**文章力や計算力**」「**より良い学び方や計画的な学習の進め方**」「**自ら課題を発見し解決していく力**」「**集団で生活していく力**」「**上級学校に進学する力**」などで「**家庭の役割**」<「**学校の役割**」となっている。

「家庭の役割」が重要とする保護者の意識は、どの項目についても全般に高く、「上級学校に進学する力」を例外として、どの項目についても、「とても重要」「まあ重要」というセカンドボックスまでの合計数値は90%を超えており、「基本的な生活習慣の確立」「学習への意欲や学ぶ姿勢」「将来の進路や生き方を考える力」「心身の健康と体力づくり」など、この数値がほとんど100%に近い項目もある。一方、「学校の役割」が重要とする意識についても、セカンドボックスまでの合計数値では、例外なく90%以上の高さとなっている。このことは、おしなべて、保護者は、家庭の役割も学校の役割もともに重要と考えているということに他ならな

い。

他方、教師側の意識を見ると、実は保護者の回答状況と大きな違いはないことが見て取れる。しいて違いを挙げるとすると、「課題を発見し、解決していく力」は家庭に期待するよりもどちらかと言えば学校の役割、また「将来の進路や生き方」については、家庭の役割でもあり学校の役割でもあると考えている教師が多いということである。教師についても、セカンドボックスまでの合計数値は、「家庭の役割」のいくつかの項目を除いてほとんどが90%を超えており、とくに「学校の役割」とする回答は、どの項目についても100%に近く、子どもの育成課題の全般に対して教師の役割意識の高さ＝使命感の高さを示すものと言える。

以上のことは、保護者と学校とが連携して子どもの教育にあたるのが双方にとって自然な要請でもあることを意味している。すでに多くの学校で取り組みが進められているが、この「要請」を実際の活動に体現していくことがこれからの学校に一層求められている課題だと言えよう。

なお、以上は小学校についての結果であるが、中学校についてもほとんど同じ傾向を示しているため詳細は省略させていただく。

5 保護者から子どもへの働きかけの状況

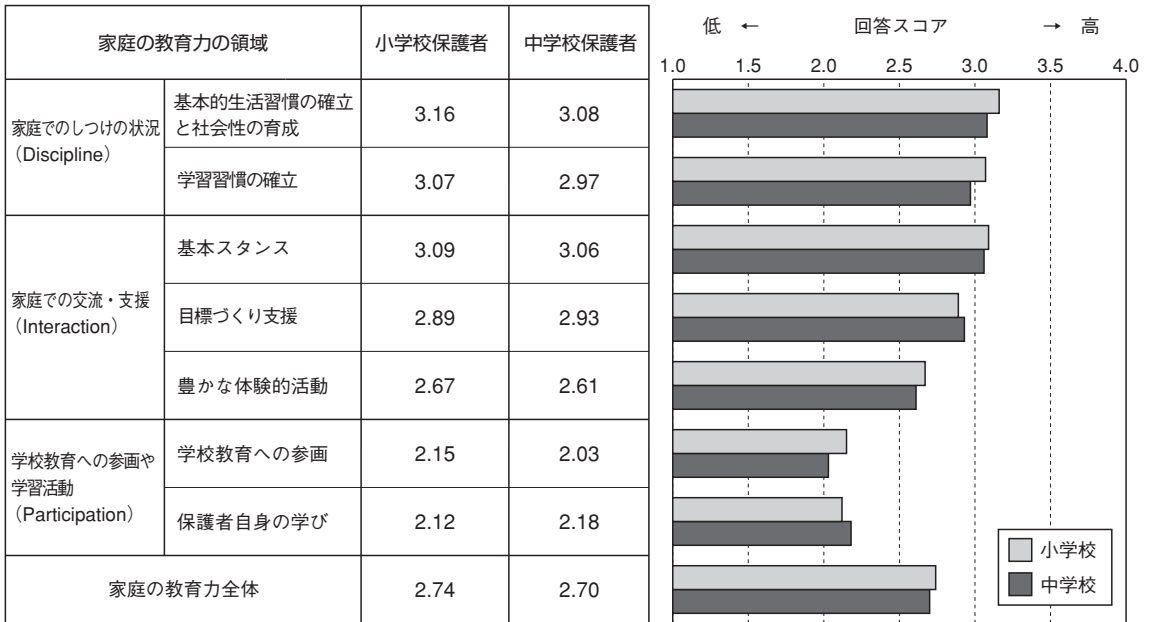
以下では、家庭での子どもに対する保護者の働きかけ（「家庭の教育力」の発揮）の状況について見ていく。

第2章1節で述べているように、「読解力」は、教科学力のみならず、学びの基礎力や社会的実践力などとも密接に関係した総合的な学力指標と考えられる。このことは、第3章各節で見られるように、データでも裏づけられるものである。前回の調査で設定した「家庭の教育力」に関わる項目の多くが、子どもの教科学力や、学びの基礎力、社会的実践力と関係があることを報告したが、このことは、前回の調査項目と「読解力」との間にも何らかの関わりがあることを予想させるものである。このことを具体的に検証する必要があると考え、今回の

調査においても前回調査の枠組み（「家庭の教育力」のD・I・Pモデル）をベースに取捨選択を加え、「読解力」育成との関係が予想されるいくつかの項目を追加して、49の項目（前回は43項目）で調査を行った（図表2-5-7(1)～(3)参照）。（「家庭の教育力」の項目と子どもの「読解力」との関係の分析については第4章3節参照）

図表2-5-6は、D・I・Pの各領域のサブカテゴリ別の平均スコア（4件法での）をグラフにしたものであり、図表2-5-7(1)～(3)は、各設問内容と回答状況の詳細を領域別に示したものである。これらの図表で設問文の後に※印を付けたものが、今回新しく追加した項目である。

図表2-5-6 「家庭の教育力」の領域別平均スコア



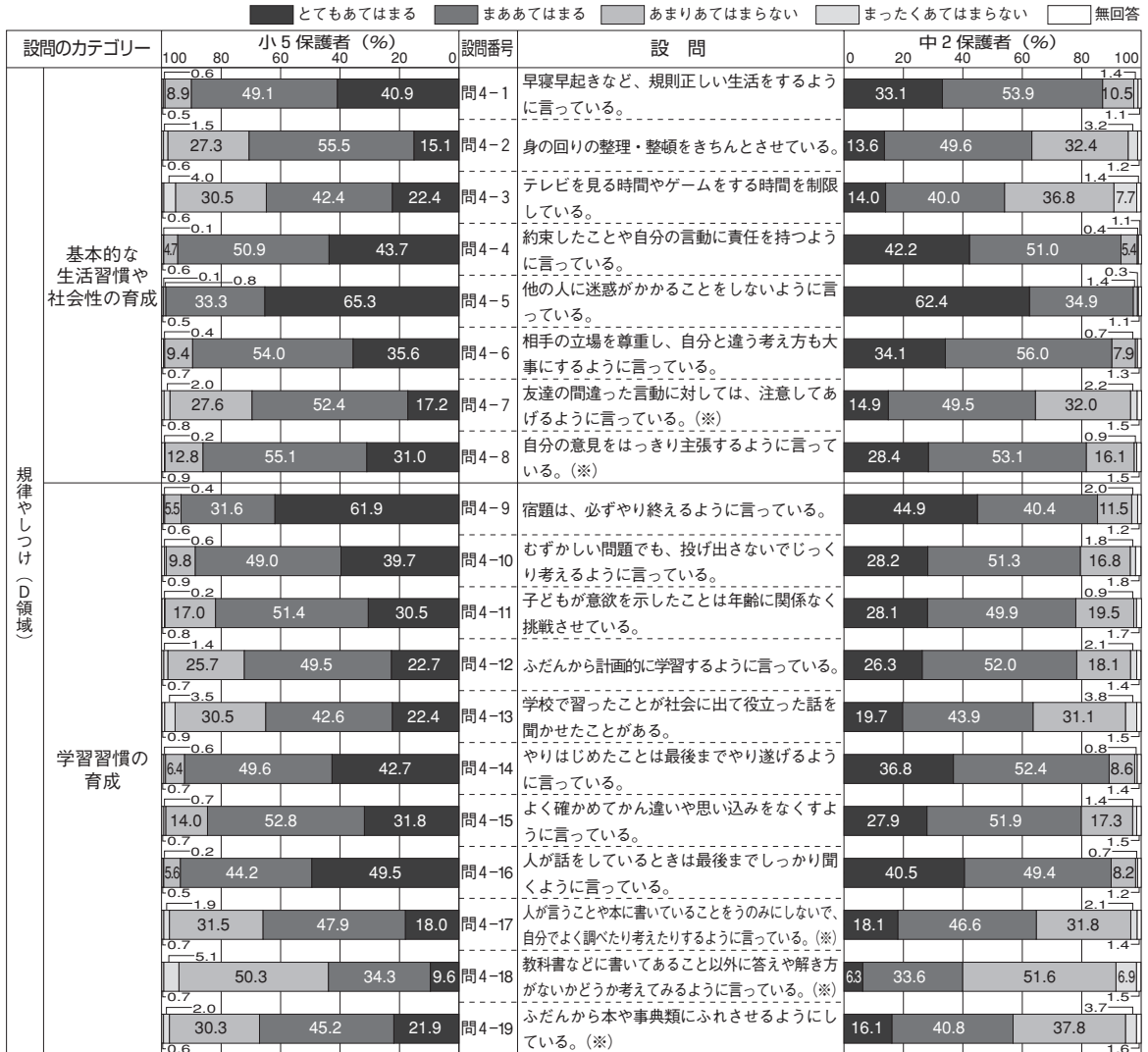
図表2-5-7の設問別の回答状況（4件法）を各領域の下位カテゴリごとに平均をとったもの。とても；4、まあ；3、あまり；2、まったく；1としてスコア化している。

図表2-5-6で見られるように、D・I・Pの各領域のスコアが、小学校、中学校ともにD>I>Pの関係となることは前回調査と同様である。

前回の調査では、各領域の回答状況と子どもへの意識調査結果をも踏まえて、報告書でいくつか

の「提言」を行った。その趣旨は、今回の調査結果からも基本的に同様に導かれる内容である。以下に、今回のデータも一部加えて若干の検証的な補足を加えながら、その趣旨を振り返っておきたい。

図表2-5-7 (1) 家庭での保護者の働きかけの状況(「規律やしつけ(D)」の領域)



「あなたの家庭での、子どものしつけや教育について、次のようなことはどの程度あてはまりますか?」という問に対する回答状況を表す。(※)は、本調査からの追加項目。有効回答件数は、小学校:約1810件、中学校:約2280件。(図表2-5-7(2)、図表2-5-7(3)についても同様)

図表2-5-7 (2) 家庭での保護者の働きかけの状況(「家庭での交流・支援(1)」の領域)

設問のカテゴリ	小5保護者 (%)				設問番号	設 問	中2保護者 (%)				
	100	80	60	40			0	0	20	40	60
基本的 スタンス	7.5	61.1	30.6		問5-1	子どもを一人の人格・個性をもった人間として尊重している。(※)	33.2	59.2	6.0		
	15.6	60.4	23.0		問5-2	子どもの誤った言動に対しては、人格を否定するのではなく、言動の誤りに気づかせている。(※)	22.8	61.4	13.8		
	13.7	67.7	17.6		問5-4	子どもの意見や判断を尊重している。	18.7	68.2	11.5		
	26.3	56.1	16.5		問5-5	子どもに、自分自身の成長や変化に気づかせるようにしている。	14.0	55.2	28.6		
	9.3	55.0	34.3		問5-10	子どものよいところをできるだけ認めて自信を持たせるようにしている。	31.7	56.3	10.0		
	6.6	53.8	38.5		問5-11	子どもが悩んでいることや、今の興味・関心を知ろうとしている。	35.4	53.9	8.7		
	22.4	49.6	25.1		問5-12	こんな大人になってほしい、という願いを子どもに伝えている。(※)	23.5	49.9	23.2		
	37.2	46.7	12.6		問5-13	子どもと話をするときには、できるだけ正しい言葉遣いをこころがけている。(※)	10.8	45.7	38.3		
	15.1	53.1	30.2		問5-14	子どもといっしょに自分も成長していこうとこころがけている。	28.0	52.5	16.7		
	11.2	49.1	38.8		問5-3	社会に出て働くようになったときに大切となる日ごろの習慣や行いの理解をうながしている。(※)	37.5	51.5	9.1		
	29.0	45.8	22.5		問5-6	子どもから将来の夢や目標について話をよく聞いている。	23.4	46.2	27.2		
	32.0	42.9	22.4		問5-7	将来の夢の実現のために、今どんなことをすることが大切なのかいっしょに考えるようにしている。	24.9	49.9	22.4		
	43.4	40.9	12.5		問5-8	教科の学習が、将来どのように役立つのかいっしょに考えている。(※)	10.2	41.3	43.3		
	22.4	54.1	21.6		問5-9	興味・関心のあることを自分で調べたり、勉強するようにすすめている。	18.9	52.4	24.9		
14.1	49.5	35.1		問5-15	働くことの大切さや尊さをいっしょに考えるようにしている。	32.7	52.3	12.7			
30.9	42.3	22.6		問5-16	自分の子どものころの夢や、その実現のためにがんばった話を聞かせたことがある。	22.1	43.5	28.3			
27.9	50.2	18.4		問5-17	成績表(通知表)を見て、子どもとこれからの目標について話をしている。	21.4	56.0	19.0			
7.1	48.4	33.2	10.3	問5-18	子どもといっしょに本を読んだり、読んだ本の感想を話し合ったりしている。	8.8	25.1	52.1	12.4		
7.4	41.4	37.6	12.8	問5-19	新聞に書かれていることについて、子どもとよく話をする。	11.7	40.8	39.4	6.3		
27.3	45.9	23.4		問5-20	子どもが小さいころから、自然の中で、家族一緒に遊んだり、活動したりする経験を積んできている。	24.2	43.7	27.3			
5.1	30.4	44.1	19.6	問5-21	地域の行事や活動にできるだけ子どもと参加するようにしている。	14.3	40.8	37.7	5.8		
11.6	25.9	39.0	22.5	問5-22	子どもといっしょに、美術館や博物館に行ったことがある。	18.7	38.9	30.0	10.9		
13.6	26.7	35.9	23.1	問5-23	子どもといっしょにパソコンを使ったり、インターネットで何かを調べたりする。	20.0	38.2	26.9	13.5		

図表2-5-7 (3) 家庭での保護者の働きかけの状況(「学びへの参画(P)」の領域)

設問のカテゴリ	小5 保護者 (%)					設問番号	設 問	中2 保護者 (%)					
	100	80	60	40	20			0	0	20	40	60	80
学びへの参画 (P領域)	学校教育活動への参画	0.7	6.0	34.6	58.1	0	問6-1	学校通信や学級通信にはいつも目を通すようにしている。	1.4	8.9	49.3	39.3	0
		0.6	0.9	70.3	20.0	6.0	問6-2	ゲストティーチャーとして授業に協力したことがある。	1.1	1.4	18.1	75.4	0
		1.0	54.0	18.2	19.3	7.5	問6-3	授業の手伝いをするボランティアとして参加したことがある。	1.6	4.1	12.1	19.8	62.5
		1.0	37.4	39.4	18.2	4.1	問6-4	保護者会やPTA総会で、学校への希望や意見を発言するようにしている。	1.4	3.3	14.5	43.1	37.8
		1.3	28.1	43.0	23.8	3.8	問6-5	授業の手伝いをするボランティアをやりたいと思う。	1.8	2.7	18.3	43.9	33.3
		0.9	24.0	42.6	26.4	6.1	問6-6	教育に関する講演会などにはできるだけ参加するようにしている。	1.3	7.9	28.1	42.1	20.6
		0.9	34.4	30.9	22.2	11.5	問6-7	教養を身に付けたり資格を取るために学習や習い事をしている。	1.4	10.5	24.5	31.6	32.0

1 高学年の「学習習慣の確立」のための働きかけの適切な強化が必要なこと

「規律やしつけ」面での保護者の働きかけは、学年が上がるにつれて弱まる傾向にある。今回の調査でも、例えば、「問4-1 早寝早起きなど、規則正しい生活をするように言っている」、「問4-3 テレビを見る時間やゲームをする時間を制限している」、「問4-9 宿題は、必ずやり終えるように言っている」などの基本的な生活習慣や学習習慣づくりに関わる項目の小5保護者と中2保護者の回答をトップボックスの数値で見ると、それぞれ41%→33%、22%→14%、62%→45%と低くなっている(図表2-5-7(1))。一方、子どもへの意識調査では、小学高学年から中学へと学年が上がるにつれて、基本的な生活習慣や学習習慣の確

立度合いを示す子どもの指標(のみならず「学びの基礎力」や「社会的実践力(生きる力)」各領域の指標の全般)が低下していく傾向を示している(前回報告書第2章2節、ならびに前々回報告書『豊かな学力の確かな育成を目指して』第2章3節&4節)。それゆえ、学年が上がるにつれて、子どもの変化・成長に応じた働きかけを行っていくことは基本スタンスとしながらも、子どもの目標づくり面での支援や子どもと一緒に体験的な活動に参加することなどによる働きかけと組み合わせながら、子どもの基本的な生活習慣や学習習慣の確立を促す働きかけを適切に強めることが、子どもの学力向上にとって大切と言えよう。

2 保護者が共に育つ姿勢の大切さ 一子育てで求められる基本スタンスとは

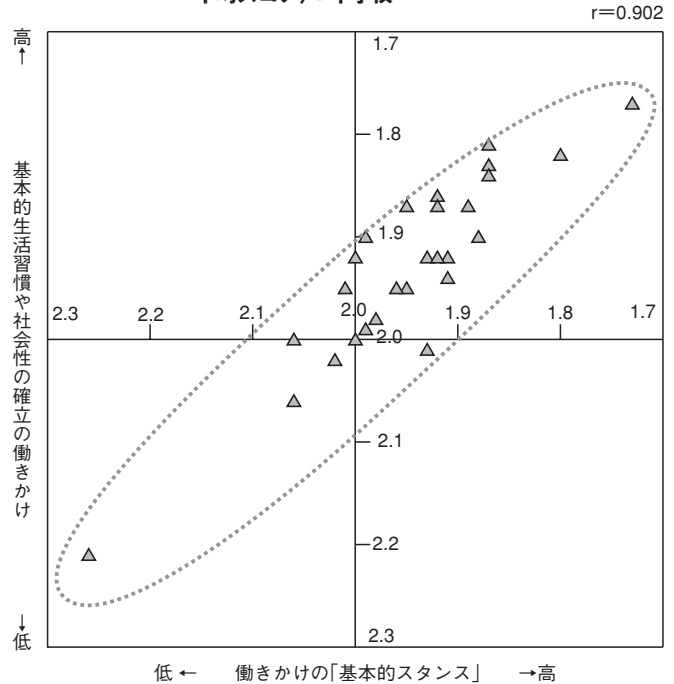
「問5-14 子どもといっしょに自分も成長していこうとこころがけている」とする保護者の子どもはそうでない保護者の子どもと比べて、「学びの基礎力」や「社会的実践力」の全般で有意な差を示している(図表は省く)。子どもへの働きかけは、頭ごなしの感情的な対応や一方的な教示ではなく、保護者自身が率先垂範の姿勢や、共に学び育つ姿勢で子どもに働きかけることが望ましいのである。「規律やしつけ」の領域においてさえ、時代の変化が激しく価値観も大きく揺れ動いている時代であるだけに、従来の価値観に基づく「きまり」や慣習を一方的に押し付けるような働きかけではなく、親が子どもと共にその正しい在り方を一緒に考えながら我が身を振り返るような共に育つ姿勢を持

って臨むことが有効であり、大切である。このことは、前述 1 で述べた子どもへの働きかけの「適切な強化」の在り方を示すものと言ってもよいであろう。

図表2-5-8は、中2の保護者について、「家庭での交流・支援」領域の下位カテゴリとして「基本スタンス」に関わる項目のスコアの学校平均と、「規律やしつけ」領域の下位カテゴリの「基本的な生活習慣や社会性の確立」に関わる項目のスコアの学校平均との関係を示すものであり、相関係数が0.90という強い正の相関関係を示している。「基本スタンス」との同様な関係は、「学習習慣の確立」(相関係数0.87)、「子どもの目標づくり支援」(同0.93)についても見られる(小5の保護者

についても同様である)。すなわち、「基本スタンス」の項目に見るように、保護者が「子どもと共に育つ姿勢」「子どもの人間としての尊重」「子どもの興味・関心の尊重と応援」「子どもに自信(や自己効力感)を持たせること」といった子どもへの働きかけの姿勢に関わる項目で肯定的に回答している保護者が多い学校ほど、「規律やしつけ」面での働きかけや「子どもの目標づくり」の支援的な働きかけが行えている保護者が多いということを表している。言い換えれば、このような「基本スタンス」に立てない保護者には、「規律やしつけ」面での働きかけや「子どもの目標づくり支援」の働きかけがいずれも成立しにくいという事情が推察される。

図表2-5-8 保護者の働きかけの「基本スタンス」と「基本的な生活習慣や社会性の確立」の働きかけとの関係(学校平均スコア): 中学校



**3 保護者の学校教育への参画意向は実際の経験の割合よりも高い
→今以上に保護者の協力が引き出せる可能性があること**

ゲストティーチャーや授業支援ボランティアなどを「経験したことがある」(問6-2、問6-3)と回答している割合と比べて、学校教育に「協力したい」(問6-5)と回答している割合は高く、学校からの働きかけ次第では、学校教育への保護者の協力をこれまで以上に得られる可能性の大きさを示している。教育をめぐる問題や新しい動向にメ

ディアを通してふれている保護者も少なくないだけに、保護者の関心や疑問と切り結んで学校の考え方や方針をきっちり説明して保護者の理解を促し、かつそのような機会を学校教育への協力意向を高め、また家庭での望ましい働きかけを促す機会として生かすような取り組みが期待される。

おわりに

この節では、「家庭の教育力」の項目について、回答状況を具体的に追うことは一部に留めたが、これは、「読解力」育成との関係を見る第4章3節で、改めて必要に応じて振り返ることにしたい。

2006年12月の国会で、「子どもの教育に対する家庭の第一義的責任は家庭にある」という「改正教育基本法」が成立し、今後、子どもの教育については、「家庭の教育責任」を問う声が高まっていくことが予想される。しかし、この風潮に対して、家庭の経済的・文化的な格差の存在をそのままにして教育の負担を家庭に委ねることは、教育の格差をますます助長しかねないという批判がある。また、今でも多くの保護者にとって子どもの教育は大変であるのにさらにプレッシャーを加えることになりかねないし、また男女共同参画の理念の進行を妨げる危険を指摘する声もある。筆者も、家庭の経済的・文化的な格差が子どもの教育格差拡大につながることはないように、公教育の充実や行政の施策・支援の充実が欠かせないと考えるものである。しかし、このことは、もちろん「家庭の教育力」を高める取り組みがすべて要らざるものであることを意味してはいない。それどころか、現に、子育ての上での悩みや気がかりを抱えて迷っている多くの保護者の存在を考えれば（『第2回子育て生活基本調査報告書』、ベネッセ教育研究開発センター、2003年）、子どもへの働きかけについて適切な指針となる情報や、保護者同士が子育ての情報を交流するような機会等を保護者に提供するような取り組みは、経済的・文化的背景の如何に関わらず、意味があることではないだろうか。本報告書が、学校からの家庭への働きかけと相互の連携に少しでも役立てば幸いである。